



紀々(きぎ)

哲學家。那覇市出身。1998年に早稲田大学第一文学部哲学科東洋哲学専修を卒業。「自ら考え、自ら動く力を磨く社員研修を」との依頼を受け、「哲学のチカラを、笑顔のチカラに」を合言葉に、さまざまな企業現場でサポートを行っている。医療・介護・福祉現場、および同世代である30代のサポートに力を注ぎ、さまざまな追い風を発信中!

私が「哲學家」になった理由

現状打開に役に立つ「哲学的発想」

「どうして『哲學家』になったのですか？」

最近、インタビュアーをお受けする機会が多いのですが、この質問は決まって聞かれることのひとつ。定番の質問です。

私が考える「哲學家」とは、大学で学んだ「哲学する(広く、深く思考する)」ことを、より日常に生かせるよう、カジュアルにした発想&実践のスタイルです。

そもそも、私が学生時代の哲学という学問には、「難解・深遠・浮世離れ」というイメージがあり、現実社会ではあまり活用できないものだと思われていました。私自身、哲学科に進んだとき、そう言われることがたびたびありました。

でも、私は、いくつもの企業現場の笑顔・元気・活気度のアップに取り組みうちに、「哲学すること」が現状を打開するカギになるのではないかと、と考えるようになりました。

「発想を豊かに」「気持ち切り替えて」「相手の立場を想像する」「自ら考える人材に」など、企業現場で多いリクエストには、広く、深く、バラエティー豊かに考える「哲学的発想」が、きつと役に立てるはずだと思ふようになったのです。

ただ、難解・深遠な哲学では、親しみにくく、活用しづらい。実際、私が哲学アレルギーの方々に会った時、その理由をうかがうと、「考えるって、難しい。面倒くさい」という声がありました。私にとつて

は、考えることは面白いことだったので、ちよつと驚きました。どうしたら、哲学することの面白さを紹介できるのだろうか。そんなことを模索しながら、目の前の現場と向き合う日々でした。

考える(い)と考える(い)の違い

そして、わかったのは、「考える」と、「考える」の違い。「考える」ということは、似ているようで違うということ。「考える」ことは、転機の追い風となりますが、「考える」「悩む」ということは、突破口から遠ざかってしまうものなのです。この「考える」力が、哲学の力だと気づきました。

考え込んだり、悩んだりするのはなくて、いかにして目の前の壁を乗り越える方策を考えるか。私は、壁にぶつかって、私のところに相談に来られた方々が、笑顔の転機を迎える場面に、いくつも立ち合っていました。その変化をもたらした原動力が、「考える」から「哲学すること」ができるようになった本人自身の変化だつたと思うのです。

ご本人には、もちろん「哲学している」という意識はありません。でも、確実に「哲学する効果」が出ていると、私は感じています。

哲学することが、日常の生活における元気、笑顔、コミュニケーションに役立つということがわかったので、私は、それをよりカジュアルに親しめるものとして広めたいと考え、「哲學家」と名付けました。そして、それをわかりやすく解説する活動を

始めたのです。だから、「理屈より、わかりやすいのでは」と考え、講演・研修では、ピアノやオカリナなどの音楽的な要素も取り入れており、予想以上に好評です。

「粋」を外して自由な視点で発想する

軽やかに、広くワクワク、そして深く「哲学する」ことで、その人が本来持っている強さ、元気がわき出てくるのだと、私は感じています。

また、哲学すること、考えることの違いは、「動」の違いなのではないかとも思います。哲学する時には、「粋」を外し、さまざまな視点から発想するので、見方にも答えにも、固定の感覚はありません。

一方、考え込んだり、悩む場合は、一点にとらわれたり、グルグル同じところを巡る場面が多く、動きの感覚も少ないように感じます。だから、何の変化も生まれなくて行き詰まってしまうのではないのでしょうか。

「考」と「行」。この二つの「コウ」がアクティブになることで、転機がグッと近くなるような気がするのですが、いかがでしょうか？

表情でも、眉間にシワを寄せているのが「考える」「ワクワク・笑顔」なのが「哲學家」という違いがあると思えます。

「考えることは、面白い!」。そう思ってもらえたら、きつと、もつと楽になるはずだと信じて、哲學家として活動しているところです。

よろしければ、あなたも一緒に、哲學家しませんか？

ときには、ワクワク
哲學家してみませんか？

